

旅立ち

踏み出そう新しい歩みを
生命の砂時計は決して止められない
過ぎ去った時は戻らないのだ

時間はあまりにも冷酷
生命の砂時計は決して止められない
過ぎ去った時は戻らないのだ

踏み出そう新しい歩みを
振り返るにはまだ早い

立ち止まつていては何も生まれない
行き先に道などないが
きっと道は後からできるもの

踏み出そう新しい歩みを
私はまだ生きているのだから

あるがままに
あるがままに笑う
あるがままに泣く
あるがままに怒る
あるがままの毎日を
あるがままに過ごす

いつか疲れ果て

荒野に崩れ落ちた私を
台地は迎えてくれるだろう
喝采の拍手で

飾ることはない
肩の力を抜いて
あるがままの自分を
あるがままに受け止める

詩集・雲

四方健二

あるがままの姿が
きっと一番美しい
あるがままの心が
きっと一番美しい

江刺の稻

「江刺の稻」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稻。全く管理されていないこの稻が、手をかけて育てた畦の内側の稻より立派な成長を見せている。「江刺の稻」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

第50回 本誌編集長 昆 吉則

〔詩集・雲〕四方健二より

あるがままの自分を生きる

この詩は、四方健二氏の詩集「雲」から巻末の二篇を転載したものだ。

四方健二氏は筋ジストロフィー症のために金沢市

市立療養所で療養中

の詩人である。筋ジストロフィー症は、幼少期に

発病して全身の筋肉が

除々に萎縮し、衰えていく進行性の難病である。

歩行困難から、最終的に

は寝たきりとなり、死を迎える。

第一詩集「軌跡」出版

から六年の間にも、確実

に体力が落ちている。昨

年、直接呼吸器をつなぐ

ために、自分の意思で気

管を切開した（声を失つた）。しかし、予想外のト

ラブルが続き、何度もな

く意識を失い、喘息まで

発症するようになつた。

自らの生が刻限を迎えるために時を刻んでいる

ことを、人は考えようとしない。誰に

も平等に与えられることは、生を受

けたことであり、死を迎えることであ

る。そして、生の意味を決めるのは自

分自身である。

有限の時の中に生きていることを自覚する詩人は、詩の一篇（「旅人は死なず」）の中で、死んだ旅人の穏やかに微笑み、どこか満足気な顔を見つめて、こう語り掛ける。

「だが君 悲しむことはない
決してこれが終わりではない」

また、皆様にご紹介下さればとも思う。四方健二氏の詩を世に出すためにこの詩集を出版し、購入読者の好意を基に「四方文庫」を設立し、同じ病で闘病生活を送る青年たちのために活用しようとしている方も多い。

詩集「雲」はA5版、150頁、1,200円（消費税・送料込み）。申し込みは〒920-0025金沢市駅西本町3-6-5（株）セイツー奥村晃氣付「四方文庫」設立準備会・☎0762(64)131／FAX0762(31)6625